



部族民通信Youtube
人類学講座

2025年10月
~2026年7月

サルトル著

弁証法理性批判

Critique de la Raison

Dialectique

マルクス主義と
実存主義まとめ主体の座
標



Jean-Paul Sartre

1905~1970 パリ

(アレクサンドルIII橋上にて
Jean Pouillonと1948年)

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

サルトル著「Critique de la raison dialectique弁証法理性批判」の共産主義と実存主義章の解説を4月13日から2回（それぞれに続回があるので実質4動画）をYoutube投稿した。本投稿はそのまとめ

- 1) 歴史（宇宙）を支配する主体は誰か？
- 2) 主体が共存する（サルトルの）仕組みはあり得るか

2部に分かれる。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

1) 歴史の主体、副題は主体の座標
サルトルの評価を、哲学で定番の辞典に求める。

« Sartre situe l'homme dans l'histoire et s'efforce de concilier le matérialisme dialectique avec la liberté de conscience individuelle. La Praxis, ou action des individus libres mais en situation, permet à l'homme englué dans la pratico-inerte (matérialité des institutions et des faits quotidiens) de surmonter l'aliénation dont il est victime (page 344, entrée de Sartre, Dictionnaire de philosophie, Nathan) »

Sartre Critique de la Raison Dialectique サルトル 弁証法理性批判

1) 歴史の主体、副題は主体の座標
サルトルの評価を、哲学で定番の辞典に求める。

« Sartre situe l'homme dans l'histoire et s'efforce de concilier le matérialisme dialectique avec la liberté de conscience individuelle. La Praxis, ou action des individus libres mais en situation, permet à l'homme englué dans la pratico-inerte (matérialité des institutions et des faits quotidiens) de surmonter l'aliénation dont il est victime (page 344, entrée de Sartre, Dictionnaire de philosophie, Nathan) »

訳：サルトルは人を歴史の中に置いた、さらに唯物弁証法を、認識の個が願望する自由と融合させるべく、努めた。Praxis、自由個人の時宜を読んでの行動、は停滞（pratico-inerte）に苦しむヒトの疎外を乗り越える力を与える…（Nathan版の哲学辞典から引用）

「弁証法理性批判」への評
「individu・praxis・pratico-inerte
個、行動、停滞」を鍵語としている
ここを注視

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

本書序文（既投稿）で哲学が革命のきっかけを醸し出す、の見解を展開する。

例としてそれまでの刀剣貴族に乗り替わる、文官法服貴族の「革命」にはデカルトの理性主義が起点となっていると説明する（フランス革命へのヘーゲルの貢献も）。

サルトルは語る「哲学者は行動し歴史に積極関与」しなければならない。

歴史は思想から始まるとも語る。praxisに思想を重ねる。革命のきっかけPraxisの実行は思想家、哲学者に求められる。

歴史の主体は思想、精神との主張と読める。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法 (疎外)	} 対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	歴史弁証法	集団行動 Praxis	} 融和
サルトル	個Praxis 認識	存在	自由	

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

Pratico-inerte 停滞とは；革命が達成して状況は一旦、安定する。制度仕組みが定まると社会は変化を求めない。しかるに歴史弁証法は、休むことなく変遷を繰り返す。歴史の変遷圧力を前にして、安定社会に不調和がきしみだす。安定が停滞の始まり、弁証法の原理です。

社会と歴史のきしみ状況に目覚めた思想家が、新たな思想を提唱し、人々を革命に向かわしめる。

さて本章（哲学の手法）の主題は主体と客体の関係をめぐる問いにある。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

マルクスはpraxisを集団的な行為として捉えるのに対し、サルトルはそれを個人の次元へと引き寄せた。個人が停滞を認識し、それを打ち破ろうとして行動する。だが、歴史弁証法において主体とされるのは唯物（史観）である。すると、物質を基盤に置く弁証法によって歴史が規定される。一方サルトルは個のpraxis行動が歴史を定めると主張する。主体は個（精神）なのか唯物史観（モノ）なのか。一方が主体であれば他方は客体とは決まっている、主体の並立などあり得ない。

Sartre Critique de la Raison Dialectique サルトル 弁証法理性批判

マルクスはpraxisを集団的な行為として捉えるのに対し、サルトルはそれを個人の次元へと引き寄せた。個人が停滞を認識し、それを打ち破ろうとして行動する。だが、歴史弁証法において主体とされるのは唯物（史観）である。すると、物質を基盤に置く弁証法によって歴史が規定される。一方サルトルは個のpraxis行動が歴史を定めると主張する。主体は個（精神）なのか唯物史観（モノ）なのか。一方が主体であれば他方は客体とは決まっている、主体の並立などあり得ない。

既投稿の動画での一節をここに挙げる。（サルトルは）ヘーゲル批判において「知は外部存在を観察するにとどまらない、それを自身に取り込み自己の内に溶解する。別の言い方で精神は休むことなしに己を客体化し問いかけ…」自己を客体化
« l'esprit s'objective » するの語が光る。
外部モノ世界（社会、歴史）が主体で、思弁弁証法を駆使して、その真理に肉薄する。

（動画はマルクス主義と実存主義1の続2026年4月13日投稿リンク
<https://youtu.be/dmA-mphkqzY> ）

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

一方でヘーゲルの客体化はマルクスと比べ「l'objectivation, simple extériorisation」単なる外部化であるとサルトルは批判する。この過程は「弁証法での思弁の第一段階では « en-soi » 自己内に留まる即自が « pour-soi » 律自に進展し、自己を外部化する過程」を示す（精神現象学）。あくまでも現象、思弁である。

マルクスでの外部化とは « à l'homme, qui produit sa vie et qui se transforme de contempler lui-même dans un monde qu'il a créé » ヒトは己の生を創り、行動し革命を達成し、自己が造り上げた世界の中で思索することができるように変身する一実質であるとサルトルは諭す。

ヘーゲルとマルクス、主体はモノに宿りヒト（精神）は客体に止まる—この点で共通する。一方、弁証法への取り組みは「思弁と唯物」の差で思弁は頭の体操、唯物弁証法では具体成果が数えられるとサルトルはマルクスを持ち上げる。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

主体の座標はキルケゴールでヒトに戻る。 « l'existence du Tout-Puissant ne peut être l'objet d'un savoir objectif, elle fait la visée d'une foi subjective »
信仰が主体である、その客体には、全能の神はなり得ない。神の存在自体が主体信仰の視野を形作る。

個の信仰が見つめ合うのは、神にかしづく自己存在です。

サルトルも自己（認識）が主体、客体は自己の存在。

Sartre Critique de la Raison Dialectique サルトル 弁証法理性批判

まとめると

ヘーゲルとマルクスはモノを主体に置くことで共通、キルケゴールとサルトルはそれをヒトに代えた。一方でヘーゲルとキルケゴールの共通は、モノ真理（絶対神が作成した己）にヒトはたどり着かない、精神（ヒト）は「疎外」に苛まれる。マルクスとサルトルは疎外を感じる仕組みを持たない。マルクスは歴史絶対を持ち上げ、個のヒトそのものを否定する。サルトルではヒトは自己の存在と見つめ合う自由を確認する

主体の座標

伝えかけ；マルクスは唯物史を主体とし、サルトルはヒトの精神こそ主体とした。その融合過程は本章（マルクス主義と実存主義）で述べられ、別章（行動から停滞へ、近日投稿）で明確に説明される。骨子は実存主義での主体を「行動」に置き換える。PDF資料で説明する。

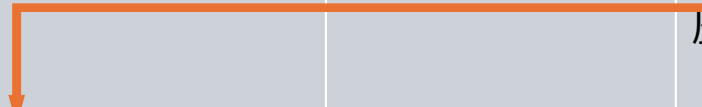
Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法 (疎外)	} 対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	歴史弁証法	集団行動 Praxis	} 融和
サルトル	個Praxis 認識	存在	自由	

Sartre Critique de la Raison Dialectique

サルトル 弁証法理性批判

思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法 (疎外)	} 対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	歴史弁証法	行動 (集団) 歴史参画	} 融和
サルトル (思考手順1)	個認識	存在	自由	



Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法	} 対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	歴史弁証法	集団行動 Praxis	} 融和
サルトル (思考手順)	個 Praxis	存在	自由	

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法	} 対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	実存主義歴史弁証法	集団行動 Praxis	} 融和
サルトル (思考手順)	個 Praxis	存在	自由	

弁証法理性批判
Critique de la
Raison Dialectique
マルクス主義と実存主義
まとめ 主体の座標
了